第16回看護実践学会学術集会

シンポジウム

タスクシフト/シェアの本質と成果

座長　澤味　小百合（公立能登総合病院　看護部長）

2019年４月１日に「働き方改革を推進するための関係法律の整備に関する法律」による時間外労働の上限規制が施行されました。人生100年時代と言われ、働き続けていく上で多様な働き方の取り組みがされている組織が増えているのではないかと思います。医療機関において、タスクシフト/シェアについての検討や取り組みが推進されている報告を多く聞くようになってきました。しかし、人口減少に向かっている近年、限られた人員の中で、良い仕事を効率的に遂行していくには、今までのやり方から少しずつシフトチェンジが必要であり、柔軟に適応していくことが求められていると考えています。

今回のシンポジウムでは、日本の医療・看護の課題やタスクシフト/シェアによる成果は何か、という根本的な内容について、富山福祉短期大学看護学科長・教授　山元恵子氏、様々な取り組み事例を３施設、金沢医科大学病院 副看護部長 山口美由紀氏、公立羽咋病院 副総看護師長 森本ゆかり氏、公立能登総合病院 副看護師長 山森勝美氏よりご発表いただきました。

山元氏からは、日本の医療の現状を踏まえ、タスクシフトの定義を説明していただきました。そして、タスクシフト/シェアが何を目的にしているのか、本質は何か、を再認識しました。患者の利益と効率化というタスクシフト/シェアによる成果を実現していくには、先駆的な事例をまねることからスタートしていってはどうかと伝えていただきました。

山口氏からは、イブニングナースアシスタントという名称で看護補助業務を実施していただける方を看護学生だけでなく幅広い方々を活用している報告でした。夕方の多重業務となる時間帯に集中して業務補助をしたことで、夜勤者は患者一人ひとりのケアに丁寧に関わることができるようになった、という内容でした。さらに、質疑応答では、働いている方々の背景等について情報提供いただきました。例えば、一般職の方は、これから先の病院での入院生活や介護について知る機会にしたい、看護学生にとっては、看護職として働く現場のイメージがつき、リアリティショックの軽減につながっている、等でした。

森本氏からは、手術室での業務を整理し、診療放射線技師や臨床工学技士が手術室看護師とタスクシフト/シェアしている、という報告でした。手術室での業務は看護師がするもの、という固定観念があったのですが、それぞれの職種における法的な業務拡大の推進をうたわれている機会を逃さず、準備から実践へ移行していった報告でした。成功のポイントとして、患者にとって最善は何か、を常に対話しながら進めていったことや互いの専門性を発揮するにはどのようにするとよいのか考え、承認しあう、ということを伝えていただきました。

山森氏からは、入院患者は高齢者・誤嚥性肺炎が多く、在院日数の長期化が課題となっている点から多職種で食支援に取り組んでいる活動を紹介していただきました。また、入院患者への対応だけでなく、入院前の方々へも対応していく必要があると考え行政と共に誤嚥予防について住民の皆さんへ行っている啓発活動についても紹介されました。住み慣れた場所で生活し続ける支援は、超高齢社会の現状として必要なことであり、住民の皆さんとのシェアについて考えさせられる内容でした。

シンポジストの皆さんから、タスクシフト/シェアの本質を忘れない、貴重な実践報告を伺い、看護のポテンシャルとレジリエンスというサブテーマにそった内容になったと思います。まだまだ様々なことが生じると思いますが、『危機をチャンスに変える看護の力』を発揮していけるよう日々努めてまいりたいと思います。